ブンゲンよもやま

2009.6.10　K．O記

そろそろ沢の季節になり、今シーズンの手始めに、揖斐川の源流である奥美濃粕川西谷に行くことにした。以前この谷をトレースしている T さんの提案によって、この谷に行く計画が成立した。

記録を検索すると、直接射能山(別名ブンゲン 1260 m)へ達している中又を登り、頂上北のコルから右又を下降するという記録が３件見つかった。出発地点からぐるっと周遊できる初級者向きの楽しげな沢の様子であった。ただ私たちは、これも T さんの提案で右又から登って中又を下ることにした。

ところで、射能山(ブンゲン)は、伊吹山(1377m)、金糞岳に(1317m)に次ぐ滋賀県第三位の高峰とのことである。私は、この辺りの地理に不案内であったので、早速調べてみると、伊吹北部の山は、伊吹北尾根から国見岳(1126m)、虎子岳(1183m)を経て射能山に連なり、さらにすぐ北に奥伊吹スキー場がほぼ稜線まで上がっており、そこからさらに二つに分かれて、西は鳥越峠を経て金糞岳に、東は貝月山(1234m)に繋がっていた。私は、この１月下旬に山スキーで金糞岳(途中敗退)に、３月初めには貝月山に登っていたので、何か不思議な気持ちに襲われた。今冬は結構この辺りをうろうろしていたのだ。奥美濃や福井、加越の山に詳しい山仲間もいるが、調べれば調べるほどに興味が湧いてきた。日本狭しどころか近畿広しを痛感させられた。谷を遡行し、山スキーで登り、山頂を極め、ついでに植生や歴史文化を知る楽しみの贅沢さ。この一帯だけを考えるだけでも気が遠くなりそうな気持ちになった。

さて、前夜の酒宴の折、私は、少しお酒が回ったのか、天狗伝説と弘法大師(空海)について、一席打った。なぜそんな話しをしたのかと言うと、人は山から下界に下りてくると知らず知らずに気持ちが鼻高天狗になっているのでは、という自戒を込めての思いからであった。登山から得られる達成感、満足感は当然の気持ちとして納得できるが、水や岩の織りなす造形への畏怖心や信仰心とはほど遠い。あえて無謀な表現をすれば、前者は町人の生活上での趣味と自己満足、後者は土人の生活上での習いと束縛である。さらに日本の自然美や風俗風習を重ね合わせて考え、環境保全の在り方にまで話しを云々すれば、ここは、自ずと天狗様に登場して貰い、この花高天狗に意見をしてもらわねばならないのである。このようなことを書いている自分自身、天狗様からご意見を頂いた一人である。天狗様にも様々な云われや種類があるが、土人の山岳信仰と結びついているものが多く、畏怖心や信仰心と結びついている。土人や修験者の心を写したものと考えれば理解できる。

一方、弘法大師は、真言仏教を広めた開祖であり、山岳仏教を考える上で、最澄と共に日本の仏教思想に大きな影響を残した偉人である(注釈参照)。それ故に、弘法大師が日本にもたらした文化的影響を把握しておくことが、日本人の精神文化を知る上で重要であると思っている。

私は、二十一世紀を迎え、人の知(文化)の変化(進化)は急激に加速していると感じている。登山文化も同様である。これは恐らくインターネットの普及と無縁ではないが、ここらのことは、改めて言及したいと思う。ここでは長くなるので触れないでおくことにする。

注釈：山岳仏教の説明。出典『フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』

山岳仏教とは、天台宗開祖最澄(767年～822年)、真言宗開祖の空海(774年～835年)などにより、政治と結びつきの強くなった奈良仏教の世俗化などに対する形で始められた山岳に行場を求めんとする修行者の仏教であり、修験道につながり日本古来の山岳信仰とも融合し平安時代に急速に発達した。

日本に仏教が伝来したのは、欽明天皇の時代の538年であるとされるが、平安時代(794年～1192年)に唐で修行を積み、本場の山岳宗教に触れ帰国した最澄や空海によって天台宗・真言宗が起こされ、比叡山、高野山などが開山される。比叡山延暦寺は最澄によって788年(延暦7年)に、高野山金剛峯寺は空海により816年(弘仁7年)にそれぞれ開かれた。それまでの政治色の強かった都市仏教への批判的意味合いも含み、鎮護国家を標榜しながらも密教的色彩を強め、国家とは一定の距離を置いた。本来、日本は国土のほとんどを山に囲まれ、古来より山岳信仰が存在したため、こうした考えが受け入れやすい地盤があったと想定される。また、世俗的な次元からは貴族などが修行僧の持つ験力に現世利益を期待したことなども山岳仏教の発達を後押しすることになったほか、天皇家など朝廷の庇護もあり、急速に一般化の道を歩む。806年(延歴25年)には山岳仏教が都市仏教と並び正式に国家仏教の一つとなる。現世利益的色彩の強い、陰陽道の色彩を濃厚に含んだ密教修法や法然の説く浄土宗なども発達。さらに山岳修行に重点を置く修験道へとつながり、神仏習合思想が発生する。また、一方で平安時代には教団は巨大化、純一化が進んだ。

山岳仏教の対象の山：高野山・比叡山・大峰山・大山・出羽三山・阿蘇山・冠岳・小金ヶ嶽・剣山・石鎚山

そろそろ、本題に戻ることにする。誰しもブンゲンとは変わった名前であり、射能山という名前も変わっていると思うようである。この山の紀行や報告によれば、ブンゲンという名前の由来は、近くにブゲン谷というのがあり、そこから来ているという説が有力であるようだ。一方、別名の射能山は付近の山中にウランなどの元素が含まれていることから名付けられたとのことであるらしい。名前としてはブンゲンの方が語呂的にもよい。

入渓のアプローチとなる粕川西谷川林道には、琵琶湖側から国見峠を越えて入ることができる。この峠から来たＴさんによれば、かなりのジグザグ道でお薦めではないとのこと。大垣から揖斐川沿いにアプローチする方が無難である。林道はかなり奥まで舗装されており、舗装が切れたところに、これより上に入らないように、簡単なフェンスが置かれてあった。右又はここより少し下ったところが出合になっていたので、この広場で今日は泊まることにした。

遡行した粕川西谷の感想であるが、ここまで来ると、谷も上流となり水量も少なくなっており、もの足りなさを感じた。しかし、山の空気は、朝の目覚めからすがすがしさに満ち、タニウツギの花が、私たちをかわいらしく迎えてくれ、水に洗われたコケの緑色も鮮やかで、全体に花崗岩質の明るい谷であった。登りに使った右又の難所は一ケ所だけで、その難所であるチムニー滝も快適に登ることができた。稜線まで谷を忠実に詰め上がり、さらにブンゲン手前の小さなピークに向けて藪こぎをして、奥伊吹スキー場方面から来る登山道に出た。ここからさらに、鞍部に下って登り返すと、三角点があり、そこが射能山頂上であった。山頂はブッシュが刈り取られ、眺望が開け、貝月山へ続く稜線、国見山に繋がる稜線を見渡たすことができた。梅雨入り前の晴天に恵まれ、すがすがしい思いに満たされた沢登りの一日であった。

~~詳しい記録はＭさんのＨＰに記載　http://www5f.biglobe.ne.jp/~masuda48/index.html~~